

サモア移民の里帰り観光

山 本 真 鳥

はじめに

1978年にサモアでのフィールドワークを始めて以来、最初は1年4か月であるが、その後断続的に2週間から3か月ほど訪れて、この社会の移り変わりを見てきた。1978年当時には信号がひとつもなく、通勤ラッシュ時には、首都アピアのちょうど中心の交差点で、警察官が台の上に立って、来る車に身振りでも指示を与えて信号の代わりに交通整理をしていた。当時2階を越える建物はなく、したがってエレベーターのある建物もなかった。今では中国の海外援助を受けて、政府は合同庁舎ビルとして10階近い建物を2棟も建て、その他にサモア中央銀行ビルもある。街中にはビジネス・コンパウンドもある。街角のあちこちに信号が光り、街には商品があふれるようになった。

1962年の独立当初頼りにしていたサブシステム（自給自足）農業との組み合わせで行う商品作物生産は不振であったが、その後盛んになった海外移民の送金が頼りとなった。しかし、併せても巨額の貿易赤字が続いていた。それが劇的に改善したのは、それまで否定的だった観光開発を、開発の手段として始めた1990年以降のことである。

観光開発のプロモーションは、主としてニュージーランドとオーストラリアで行い、両国の中産階層の白人カップルや家族をターゲットとしていた。それなりの成果は上げていたが、実際に海外からサモアを訪れる人々

のかなりの人数が、実はサモア人の海外移民（ディアスポラ）であった。南太平洋諸島の中でも、サモアは入国データでVFRが大変多いことで知られている。海外移民の里帰りは、観光事業の中ではVFR（Visiting Friends and Relatives）と呼ばれるカテゴリーであり、当初観光開発のターゲットとなることはなかった。

しかし、里帰りするサモア移民は観光を行わないわけでもなし、それなりに観光客として想定し、彼らをもてなす工夫もあるのではないかと、いやそれどころか、実際には意図せざる結果としてもてなしている、というのがこの論文の主旨である。この論文のテーマの着想は、2000年代のフィールドワークの中で得て、2009年の *People and Culture in Oceania* で英文論文に結実している。その時と結論自体はあまり変わらないが、立教大学観光学部での授業の一コマでゲストスピーカーとして、話す機会があり（2021年11月）、それを日本語論文として執筆しなおし、発表するものである。

私がサモア人の里帰り観光に興味をもつようになった頃、観光業界が里帰り観光をプロモーションすることも、研究者が注目することもなかったが、最近はVFR観光として一定の注目が存在している（e.g. Huang, King and Suntukul 2017; Asiedu 2008）。

サモア人海外移民の歴史

既に、経済志林の既刊論文に詳細（山本 2021: 193-196）はあるので、ここは概略だけを示そう。

オセアニアの南方、ニュージーランドとハワイ諸島を結ぶ線上のニュージーランドよりもサモア諸島は存在する（地図2）。19世紀後半の英国、米国、ドイツの植民地争奪の結果、1899年にサモア諸島を東西に分け、西はドイツが、東はアメリカ合衆国がそれぞれに領有することとなった。西は第一次世界大戦の結果、ニュージーランドの委任統治領となり、その後第二次世界大戦後の1962年には「西サモア」²⁾として南太平洋で初めての独立

を達成した。東のアメリカ領サモアは、次第に自治が行われるようになってはいるが、未だ合衆国の末統合領土である。双方ともに文化や言語を共有していたが、宗主国が異なったために、現在では様々な違いが生まれている。

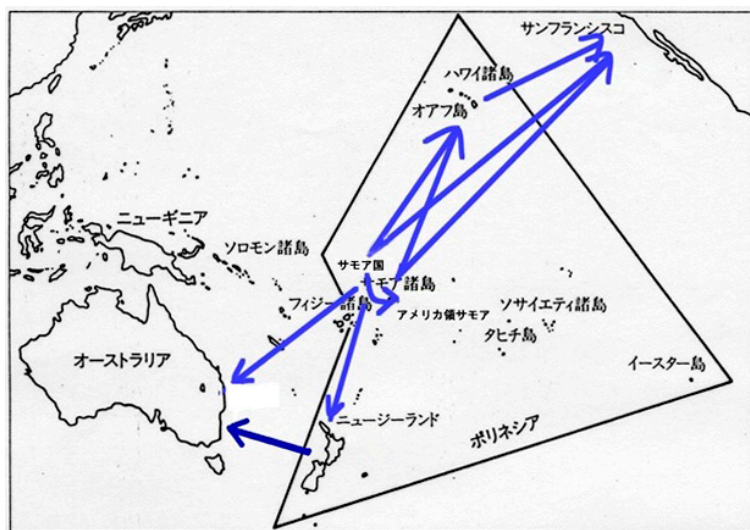
サモアが西サモアとして独立した頃には、サブシステンスと商品作物の栽培が主たる生業で、現金収入のある人は少なく、移民の送金は大きな頼りであった。宗主国であるニュージーランドへの出稼ぎ労働力移動が始まったのは、第二次大戦後のことである。最初は単なる出稼ぎだったのが、やがて定住者が出るようになり、次第にニュージーランドの主要都市ではサモア人コミュニティは大きくなった。先に定住した人を通じて、いわば連鎖移民で本国からはさらに多くの、とりわけ若い人が海を渡った。

一方のアメリカ領サモアでは、海軍がパールハーバーに移転したときに、既にアメリカ軍に入隊していたサモア人や軍属も移動し、彼らを頼ったり自身が入隊したりして、本土への移住が始まった。主にハワイ州、カリフォルニア州の都市部にやはりコミュニティができるようになった。アメリカ領サモア人は、合衆国国民として本土（ハワイ州を含む）に自由に出入りができたし、軍隊への入隊者も多く、若い人はどんどん移民した。1960年間近になると遠洋漁業の基地と缶詰工場が誕生したし、合衆国のテコ入れもあってアメリカ領サモア人の暮らし向きはなかなか良くなったといえる。ただし、若い人は本土に移住するのでアメリカ領サモア自体は労働力不足に陥ったため、特に西サモアからまた一部はトンガから移民労働者を受け入れた。アメリカ領サモアは、もともとの親族のいる西サモア人にとって手軽な移民先で、出身の村との行き来も楽だし、労働力の空洞化を埋める担い手となった。さらにここを起点に、合衆国に移民した西サモア出身者も少なからずいた²⁾。

1) 西サモア（独立国）は1997年にサモア独立国と国名を変更した。現在では「サモア」だけでも通用するようになっている。

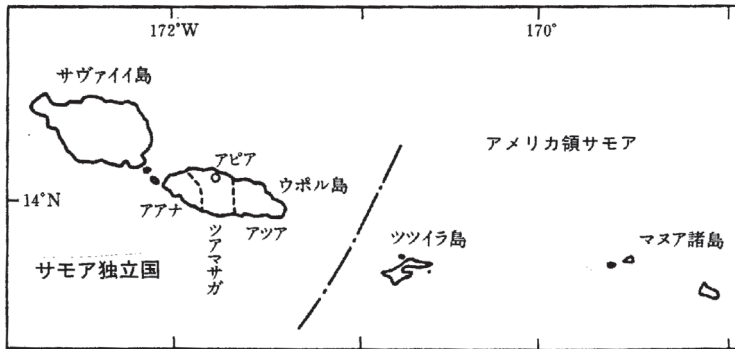
2) アメリカ領サモアの国籍は生地主義をとっているため、両親が西サモア生まれであっても、

やがて、ニュージーランドからオーストラリアに移動するサモア人も出てきて、シドニーやブリスベン、メルボルンなどにもコミュニティができ、そうするとニュージーランドを経由せずにオーストラリアに直接渡る人々も出た。概括すると、アメリカ領サモアや環太平洋先進国都市に出ていく人の流れが矢印のように生じた（地図2）。サモア独立国の人口196,000人（2016年センサス）³⁾ に対して、合衆国のサモア人人口は、1 エスニック選択で133,000人、複数選択で257,000人（2020年センサス、ただしアメリカ領サモアのサモア人を含む）である。ニュージーランドのサモア人人口は、183,000人（2018年センサス）となる。ただし、ニュージーランド在住サモア人のほとんどがサモア独立国（西サモア）出身者であるのに対して、合衆国のサモア人人口は、独立国出身者とアメリカ領サモア出身者の両方が



その子はアメリカ領サモアで生まれる限りは当地の市民権が得られ、合衆国国民となる。アメリカ領サモアは、西サモア人が世代を経るに従って、アメリカ合衆国国民、さらに市民となる可能性を秘めた土地である。そのような経過で、西サモア出身者で合衆国市民となった人は多い。

3) その後まもなく20万人を超えた。



地図2 サモア諸島

含まれているが、前者の方が俄然多い。アメリカ領サモアのサモア人人口も西サモア出身の方がずっと多いのである。いずれにせよ、オーストラリア在住サモア人も含め、本国在住者の約2倍以上の人口が、今では海外に住んでいる。

最初の移民の動機は、主として出稼ぎであった。また給料を本国の両親や、家長に送る送金、教会への献金などを目的としていた。また、子どもの教育も彼らが目的として挙げている。また、収入はサモア在住の家族と共にビジネスを始める元手にもなった。現在では移民先で二世、三世の時代となっている。最初は言語の壁もあったし、非熟練工として下積み生活をする人々も多かったが、世代を経るに従い、もはや言語の壁もなく、様々な分野で活躍する人々もでてきている。また、現在では、結婚、就職などを経て、世界各地にサモア人が拡散している。彼らをサモア人ディアスポラという呼び方が一般化してきた。ここから先は、主としてこの呼称を用いよう。

ディアスポラの本国・親族への貢献

移民の始まりは出稼ぎであった。独立以前、また独立してからも国内で

現金を入手する道はそれほど自在ではなく、アピアでの政府・会社・店舗で給料を得る職は限られており、村落部ではほとんど教員に限られていた。もっともアピア市との間を往復するバスネットワークはかなり広域に渡っていたので、近郊から通勤する人はいた。しかし、給料をもらったとしても、当時の給料は大変安かった。合衆国の最低賃金レベルまではいかないにしても、アメリカ領サモアでの収入は西サモアの数倍にも上り、そのような情報から、海外との賃金差に人々は敏感であった。海外に既に出ている人々は年若い兄弟姉妹やオイやメイを呼び寄せ、家に住まわせて食事も提供し、稼ぎは親（自分の親や、兄弟姉妹）に送るようにと諭した。独身時代は、給料をできるだけ送金に回すことが、孝行息子・娘のすることとされた⁴⁾。

当時は送金すると郵便局にそれが届いたことをラジオ放送が知らせていた。「以下の名前の人々、xx 村の aa さん、yy 村の bb さん、zz 村の cc さん、以上の名前の人には、アピアの郵便局に送金が届いているので出頭してください」といった具合である。また、直接に家族の住む教区の牧師に献金を送金してくる人もいた。このほかに、本国から訪ねてくるサモア人の知り合いに帰国時に現金を託す人もいた。

ただし、これらの送金はもちろん日々の生活に用いられることもあったし、本国の親族がビジネスを始めるための資金となることもあったが、多くの金銭は本国で行われる儀礼交換⁵⁾の費用となった。

サモア人の従来の暮らしは、父系的傾きをもった親族集団⁶⁾アイガという大家族・世帯を単位に成り立っているが、それと同時にそれらは儀礼交

4) もっとも、結婚した場合には、夫婦で子どもを養わなくてはならないので、毎月の仕送りは義務とはみなされないのが一般的であった。ただし、女性の場合もサモア移民は有職率が高いのであるが、これは自分の親族に送金する目的があったためであろう。

5) 儀礼交換は筆者の長らくの研究テーマであり、書籍（山本・山本 1996; 山本 2018）、論文（e.g. Yamamoto 1990; 山本 2021）で議論しているので詳細はそちらを参照されたし。

6) サモアの親族集団の形成はそれ自体が論文・書籍のテーマとなるようなものであるが、ここでは簡単に説明しておく。ひとつの村に所属し、そこに耕地・宅地を持ち、いくつかの首長

換の単位ともなる。儀礼交換は、サモアではファアラベラベ (*fa'alavelave*) と呼ばれる一連の儀礼で、1) 結婚式・初子の誕生祝 2) 首長称号の就任式 3) 葬式、4) ファアウルファレガ (教会新築祝い)、ウムサガ (新築祝い) を指す。共通するのは複数のアイガ同士で決まった財の交換が行われることである。

儀礼交換で取り交わされる財は、主としてファイン・マツト⁷⁾、食料 (主としてブタ、その他現代ではカートン入り魚肉缶詰、冷凍チキンの箱等)、現金などが用いられる。かつて、食料などは自給自足で生産していたものであるが、今日では商品に置き換えられている。またファイン・マツトも必要に応じて現金で調達可能なものとなっている。これら儀礼を主宰するアイガに姻族となるアイガが訪問して、そこに儀礼の出費を助けるための贈与を行い、代わりに返礼を貰って帰ることが習慣となっている。

儀礼を主宰するアイガは、それら訪問者に渡す返礼を用意しなくてはならないが、持参する財よりも返礼は少ないので、主宰者側は訪問を受ける度に手持ちの財を増やしていくことができる。しかし儀礼に際して、牧師や地元のマタイたち、建物を建てた大工またはコントラクターに、決まった種類の財を贈らなくてはならない。また訪問する姻族アイガにしても、近い関係の場合 (結婚式の花嫁の母のアイガなど) には、贈る財ですら相当大量にならざるを得ず、そのために助けにやって来るさらに姻族となるアイガがあるなど、儀礼交換は、姻族関係を通じて、芋づる式に広がっていく (図1)。

儀礼交換は、サモア人は常に巻き込まれる危険をはらんでいるので、ファアラベラベ (トラブル、障碍の意味) そのものである。ディアスポラに

称号名を共有するアイガ (*āiga*) がある。アイガはいくつかの大家族を営む世帯からなる。アイガへの帰属は、父系に傾きはあるが、父母どちら方にも辿ることができ、世帯ごとに耕地・宅地を分けてもらうことで、かつては生活を営んでいた。アイガ全体の長となるマタイ (*matai*) も世帯の長となる者もマタイといい、それぞれのマタイはアイガのもつ首長称号名を授与されている。マタイを中心にアイガや世帯の凝集性が強い。

7) パンダナスの葉から作った細かい編み目のゴザで、サモア独特の文化的価値をもつ。

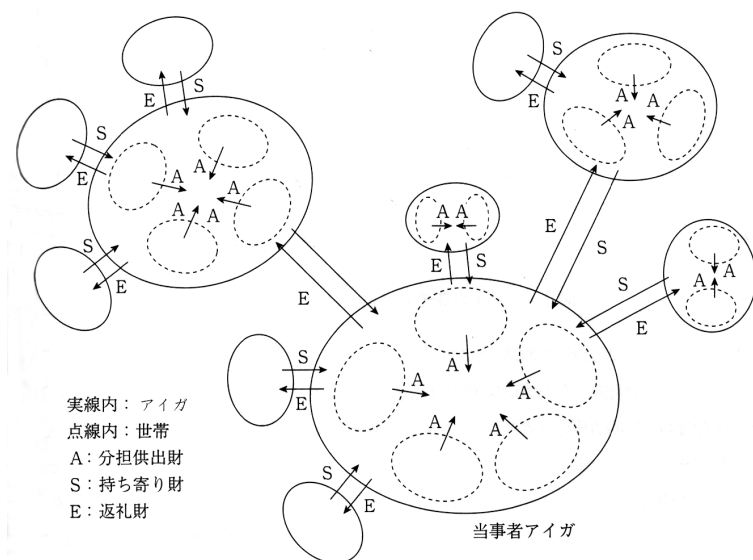


図1 儀礼交換における財の集積モデル（出典：山本 2018: 115）

とっても、始終本国から、またファアラベラベなので頼む、という連絡が入って、送金することもよくある。海外にいた方が現金を入手しやすい、と本国の人々は考えている。ディアスポラは、食料は自給自足ではないし、生活にはすべてお金が必要なので、決して楽ではない、とこぼしつつも、基本的には本国の親族の要望には何とか応えようとしてきた。

ディアスポラが、飛行機で駆けつけて、本国のファアラベラベに参加することもあるが、それにはかなりの資金が必要となる。足を運べば航空運賃もかかるし、ファアラベラベの資金を出すのみならず、周囲の人にそれとなくお小遣い程度の現金を配ったりもする。また、ディアスポラ・コミュニティでもファアラベラベが開催されることはあり、その時に本国の親族の代表者、マタイや老人などを招待して来てもらうこともある。そのような時には、航空運賃もディアスポラが負担し、1か月から数か月の滞在もすべて面倒を見て、お土産の金品付きで帰国させることになる。

このようにディアスポラの送金や国内に直接間接に持ち込まれる現金は多大なものがあり、多額の貿易赤字を抱える国家としてのサモアにとって送金は大きな意味があった。独立当時は農業生産（バナナ、コブラ、カカオ）の輸出主体の経済でやっていく計画であったが、農産品の国際価格は変動が大きく、安定的な収入を見込むことは難しかったし、生産は減少し続けた。独立前から始まっていた出稼ぎが独立を機にさらに盛んになっていった。1978年当時、ともかく輸入を減らすべく、輸入、特にぜいたく品にかかる関税は半端ではなく、確か自家用車には200%の関税だった。しかし、そうした政策も輸入超過を防ぐことができなかった。その環境下で、ディアスポラが故郷の両親や親族に送る送金は国家としても重要な収入であった。以下、簡単にまとまっているので、著者が別途書いた論文から引用する。

「サモア独立国の国際収支バランスで見ると、多大な貿易赤字があり、それを埋めていたのが、移民の送金である。……存在する赤字は移民の送金でつじつま合わせができています。例えば2020年11月2日アップデートのサモア中央銀行データ（Central Bank of Samoa Quarterly Bulletin）から、2017年下半期—2020年上半期のデータを見ると、モノの輸出入は（年間）7億サモア・ドル台の赤字であり、サービス収支（この多くは観光業収入）3億～5億サモア・ドルで差額を埋めても、なお3億～4億サモア・ドルの赤字があり、第一次所得収支を足すと更にマイナス幅が大きくなり、4億～5億サモア・ドルの赤字である。第二次所得収支（送金収支）で5億サモア・ドル前後の収入を合わせて黒字が実現されている」（山本 2021: 198）

1990年頃までの国家としての西サモアは大きな貿易赤字を抱えており、これをどうするかは政府の大きな課題であった。輸出産業がなかなか育たないサモアで、ディアスポラの送金は多大な収入源であったが、貿易赤字

をすべて解消できていたわけではない。これを解決すべく始まったのが観光開発である。上記の引用は、観光開発が軌道にのった最近のデータであり、観光事業があって初めて収支のバランスが取れるようになったのである。多大な貿易赤字の埋め合わせをしているのが、ディアスポラの送金と観光収入である。

観光開発とその成果

1990年に至るまで、政府も民間も観光開発には消極的であった。サモアの慣習では、ホストは威厳をもって客に接し、料理や土産物をふんだんにふるまって歓待する、というのが原則であった。確かに、サモアの慣習で行われてきているマラガ (*malaga* 旅行の意味) は、もともとは村の団が他の村を訪問して、歌やダンスの交歓を行うのであるが、客はファイン・マットを携えていくだけでよく、ホストは多大な食料を費やして歓待するものだった。現在でもこれは教会の婦人会や青年会などが教会施設建設の募金のために、海外の教会を訪れたりする形で盛んに行われている (山本 2018: 178-180)。観光においては、ホストが客に仕えて収入を得るのであるから、サモアの慣習にはそぐわないものだといえる。メレイセアー・メレイセアーは1980年の論文で、以下のように論じている。

商工会議所会員は多分別意見と思われるが、ほとんどのサモア人は観光に対してアンビヴァレントな態度をとっている。アピアのあたりの人で観光に反対する人は少数派であろうが、非都市化地域の人々は、ツーリストのドルには魅せられながらも、これ以上自分たちの所でリゾート開発が行われる見通しを嫌悪する。観光が、非都市化地域の人々の尊厳や自立、慣習、権威構造、道徳などに悪影響があるのではと危惧する。共通する不安は、若い女性のミニスカートやビキニ、若い男性のロングヘアといった西洋のファッションが、悪いノパパラギ (白人)

のせいで流行するかもしれないということだ（1982:42）。

というわけで、筆者が1990年に至るまで断続的に観察した限り、時々議論にはなるけれども、一向に観光開発は行われず、アピア観光局の案内ブースに常置してある観光パンフレットは、相当古く、茶色いしみがつき、日焼けしていた。

ところが、1990年頃から政府の大きな政策転換があり、政府自体が観光開発に取り組むようになった。当時はトフィラウ・エティ・アレサナが首相であり、その右腕ともいうべきツイラエパ・サイレレ・マリエレガオイ⁸⁾が財務大臣と観光大臣を兼務し、この人のイニシアチヴで観光開発が進められていった。南太平洋観光会議やEUなどの協力でさまざまな調査が行われ、結果は『西サモア観光開発計画1992-2001年』にまとめられた（Tourism Council of the South Pacific 1992）。非都市化地区のマタイたちを、サモア特有の土地所有制度⁹⁾があるので、パパラギ（白人）にイニシアチヴを取られてしまうことはない、と説得した。

1991年から観光開発事業が始まる。まずは各村に参加を求め、美化運動を行った。村々を繋ぐ道路を含め、道路から見えるあたりの掃除、道路沿いにゴミ箱の設置とゴミ集め等を行った。すべての村に設置ができているわけではないが、かなりの数の村にはドラム缶を半分に切り、色鮮やかにペンキで塗ったゴミ箱が道路沿いに並んでいるのを観察できる。村へ依頼して、Welcomeといったアーチも作った。

さらにホテルやビーチ・ファレの開発をして宿泊施設を整えた。ビーチ・ファレはサモア特有の施設である。サモアの家（ファレ）はもともと柱だけあって壁がない。それを模して、しかし土間ではなく高床にして、浜辺

8) トフィラウが1998年に病死した時には、彼が首相に指名され、その後2021年に至るまで、連続して首相を務めた。

9) 慣習地はサモアの土地全体のほぼ85%を占め、アイガの所有となっている。また法律でサモア国籍を持たない者は土地所有ができないことになっている。

に数軒建てて、宿泊可能とした。ビーチはちょうどハワイなどのプライベートビーチのようにすぐ泳げる環境である。夜は波の寄せる音を聞きながら眠りに落ちる。流石に壁がないのは欧米人にとってはプライバシーがないので敬遠されるが、サモアのビーチ・ファレは夜になると軒下のすだれを下ろす。

ホテルを建てるには結構な資本も必要で、土地所有の問題もあり、資本の蓄積もない。外資を導入して立派なホテルを建てるということには多くの困難が伴うが、ビーチ・ファレのような簡素な建物をビーチの使用権を持ったアイガヤ村が簡素な宿泊施設を作ることはハードルが低いし、地元の観光収入を確保するためにも意義深いといえる。その他少ないながら地元資本で、高級なりゾートも2、3開設された。

観光スポットのリストアップもコンサルなどとの協業で行われた。滝などの景色、潮吹き岩、天然の滝つぼのような飛び込み、水浴スポット、ビーチなどを示した地図を作り、案内の看板をたてた。

『宝島』で有名なR・L・スティーヴンソンの邸宅がサモア政府の管理下にあり、独立以来名目的には国家元首の官舎となっていたが、国家元首はそこに住むことがなかったので、長らく空き家になっていた。そこを博物館にして観光スポットとした。アメリカ合衆国に本部のあるスティーヴンソン基金の助力を仰いで、修復工事を行い、スティーヴンソンの館を再現した。サモア人の案内人の養成も行った。2階にあるスティーヴンソンの書斎や本棚、彼の愛した暖炉の前にはトラの皮があり、ペンなどを並べたデスクが置かれている。彼や家族の寝室も見学対象で、階下には大きなダイニングルームがあった。

これらの準備が整うと、ニュージーランドとオーストラリアではプロモーションが行われた（Tourism Council of the South Pacific 1992）。さらにサモア観光局は、サモアのイベントをカレンダーに書き込み、毎月何等かの行事が入るように整えた。9月だけは何も入らなかったのもので、そこに観光祭を入れることとした。サモアの国花であるテウイラ（赤い花の咲くジ

ンジャー) にちなみ、テウイラ観光祭 (Teuila Tourism Festival) と名付けた。

さて、それらの結果として、サモアを訪れる観光客の数は右肩上がりに増加している。1993年には年間の訪問客が4,000人ほどであったが、2004年にはほとんど2.5倍の10,000人近くに及んでいる。2010年から、2019年までの訪問客の数は、表2に提示してある。増加のスピードはやや緩んでいるかもしれないが、ほぼ右肩上がりは続いていて、1万5000人を越えて2万人に近づいている。この後新型コロナのために、観光業は壊滅的な打撃を受けた。現在回復中である。

テウイラ観光祭

体勢が整うまでに、試行錯誤があったが、2000年を超えるころにはおおよその体制が整い、定着するようになった。テウイラ観光祭は、サモアのいわゆる伝統文化を見せて、サモア文化を楽しむフェスティバルである。ラジオやテレビの中継もある。いわゆる伝統文化、と書いたのは、土着文化そのものというよりは、ヨーロッパ人との接触が19世紀前半に始まり、その後の近代化も含めた文化変容の中で培われたものもあるが、サモア人が「サモアらしいもの」と考えているもののショーケースのような祭りである。毎年9月の第一日曜日に前夜祭として、宗派を超えた教会から参加のある聖歌隊のコンペティションがある。サモアでは日曜日は安息日であるが、聖歌を歌うことに問題はない。その後月曜日から、土曜日までさまざまなイベントが続く¹⁰⁾。少々データは古い¹⁰⁾が、2003年のスケジュールを表示しよう (表1)。

10) 残念ながら2025年9月に予定されていたテウイラ観光祭は、8月末に国政選挙が予定されることになったために中止となった。選挙直後には、候補者同士や、政党間でちょっとした混乱が起こることは予想されるので、あらかじめ中止が決められたようである。ミス・サモア・コンテストだけは後日開催された。

表1 テウイラ観光祭2003年 活動とイベント一覧

9/31	日曜日	教会聖歌隊コンペティション	
9/1	月曜日	クリケット開始 売店開店 開会の祈り 伝統的歌のコンペティション	金曜日まで
9/2	火曜日	ウィービング（ファイン・マット編み）実演 彫刻アートと手工芸実演 棒上り 伝統的ダンスのコンペティション	金曜日まで 金曜日まで 木曜日まで
9/3	水曜日	タウラファガ（伝統的遊び、石投げ） ウム（石蒸し料理）実演 プラスバンドのコンペティション ファイア・ダンス・ショー マクドナルド提供のバラエティ・ショー	
9/4	木曜日	棒上り カヌーのコンペティション ファウタシ（伝統的戦闘カヌー）レース決勝 マクドナルド提供のバラエティ・ショー	
9/5	金曜日	花のパレード（ミス・サモア出場者中心に） 閉会式・コンペティション表彰式	
9/6	土曜日	ミス・サモア・ページェント	

（出典：サモア観光局配布のテウイラ観光祭プログラム）

かいつまんで、いくつかの説明を加える。各村や学校などの代表が競うコンペティションがある。サモアのダンスも歌も「伝統的」と呼ばれている。ただし、すべてがサモアの土着のものかという点、近隣のトンガ諸島、フィジー諸島との間にはヨーロッパ人の来島以前から交流があったので、その影響を結構受けている。うちわを持って踊る女性のダンスはフィジーから来ていて、權を使った男性のダンスはトンガから来たという一部サモア人から聞いた。しかし、既にサモア人の演目としては定着していて、若い人には見分けはつかないだろう。どちらも学校教育に取り入れられており、子どもの頃からなじんでいるものである。歌は、半ば踊っているような指揮者の指導で合唱するのであるが、学校教員の中には新しく作曲したり、



写真1 ダンスのコンペティションに向かう集団。2006年度テウイラ観光祭

作詞を行う人がある¹¹⁾。指揮者はサモアのタウポウ（「村の王女様」）またはマナイア（「村の王子様」）の扮装をしている。クリケットは、イギリス人（ないしはニュージーランド人）によって持ち込まれたものであろうが、サモアのルールがあり、サモアで作った道具で¹²⁾、主に村対抗で競技が行われる。ファイア・ダンスは、第二次大戦後サンフランシスコ在住だったアメリカ領サモア出身のダンサーが演じるようになって普及したもので、近年始まったものであるが、すっかりサモア的なものとして定着している（Letuli 2004）。バラエティ・ショーは、子どもから大人まで、誰もが参加

11) 日本で流行した『サモアの歌』はもともとある小学校の独立記念祭への生徒出演のために教員によって作詞作曲されたものだった。

12) イギリスの影響を強く受けたオセアニアの諸島各地ではクリケットは土着化している。『トロブリアンドのクリケット』はその一例である。サモアのクリケットのボールは商品作物のゴムの木からとった樹液をバナナの葉の上に伸ばして長いひもにしてから、くるくるとまとめたものであるし、スティックも自分たちで木を削って作る。

できる学芸会のような催しである。サモア文化を見せる催しは一般参加者が飛び入りで参加可能となっている。

ファウタシ（戦闘用カヌー）は、ポリネシアに特徴的なアウトリガーカヌーではなく、40人ほどが乗船可能な長いボートで、2名ずつがカヌーに直角にしつらえられた台座に並んで座ってたがい違いにそれぞれ右側か左側のオールを担当して漕ぐ。ボート競技のエイトを大きくしたようなもので、コックスに相当する指揮者もいる。このカヌーは現在すべての村に存在するわけではないが、村対抗のレースそのものは現在でも盛んにおこなわれている。

テウイラの最後を飾るのは、ミス・サモア・ページェントで、その前日に行われるパレードには、ミス・サモアを載せたディスプレイ車も登場する。近年では必ず、ディアスポラのコミュニティがページェントに送り込んでくる候補者がある。ダンスのコンペティションにも海外コミュニティ



写真2 合唱のコンペティションに参加した集団。2003年度テウイラ観光祭

からの参加が見られる。

また、この祭りに伴う競争的な要素によって、人々の準備段階に関わるエネルギーはたいしたものである。村や教会の青年団は、仕事を終えた後の1～2時間をダンス等々の練習に費やす。おそらく早いところは新年になったあたりで、この準備を始めるという。ファウタシの訓練は早朝5時、6時から行うことが多い。海辺近くに泊っていると、ファウタシの櫓を操るための掛け声が響く。この祭りが始まってから、人々のダンスの腕前はどんどん上がった。私がフィールドワークを始めた1978年から1990年にかけて、人々のダンスの実力はずいぶん落ちていた。伝統文化が衰退するというのは、どこでも見られることだったから、嘆きはしたもの、避けられないかと納得していた。しかしこの祭りが始まってから、人々は各段にダンスの実力を上げた。

さて、そのようなサモア文化満載のテウイラ観光祭だが、実際にこの祭りを誰が一番楽しんでいるか、というと、実はサモア人自身なのである。この祭りを始めた当初は、観光客とは、ニュージーランドとオーストラリアの白人を想定しており、彼らにサモア文化を見せる、ということを旨としていた。しかし、たまたまサモアを目的地に選んだ観光客は、そこまでサモア文化に精通しているわけではない。例えば、ダンスの出し物、ダンスのカテゴリー（マーウルウル＝優雅な動作で踊る、サーサー＝座ったまま手だけで踊る、ファータウパチ＝男性がアクロバットの的に踊る等）の違い、所作の美しさの評価の理解は、初めて見た人々には難しい。祭りが始まった頃、各村のダンスはそれぞれ最低20分ほどかかったので、全部の村や学校がダンスを終えるのに2日かかった。白人観光客はすぐに飽きてしまい、帰っていく。その長い長い出し物に見入って違いを評価していたのはサモア人だけであった。ファウタシもアピア湾の東側がゴールであるが、このレースを観戦している白人はほとんど見たことがない。一方、観光客の冷めた眼に比べて、サモア人自身の熱意は特別なものがあった。この祭りとディアスポラの関係は、次々章で詳しく取り上げたい。

VFR (Visiting Friends and Relatives) 訪問者

VFR（親族・友人訪問）とは日本人にはなじみが薄い統計カテゴリーであるが、入国管理の一端として、カウントしている場合がしばしばみられる。観光学の分野では、従来VFRを観光客として扱ってこなかった。VFRの人々は宿泊費（また場合によっては食費なども）をかけないので、旅費が少ない。つまりお金を使わない人々なので観光振興にあまり意味がないと考えられてきた。観光研究は主として観光を振興する実学として始まっているので、お金をかけない客にプロモーションはしない、ということである。

風向きが変わってきたのは1990年代頃になる。もっと実態に基づく分析が必要で、レジャー客との違いはありうるけれども、カテゴリーとしての特性を見出すべきで、そうした視点からこれも観光客として考えてよいのではないか、といった論調が始まり、2000年になると論文が散見されるようになった。主としてアメリカ合衆国、イギリス、オーストラリアでの研究が主流といえる（Rogerson 2015: 139）が、実際に扱う論点は、かなり多様である。まずは、国内の場合にVFRのデータは厳密にはとれない場合が多く、それを推測する、という研究があり、また今後のVFR訪問者の動向をシミュレーションするといった研究もある。

そもそも、移民とVFR観光とは相関関係がある。母国を離れて、第二の故郷とする場所に移民した人々、またその子どもたちは、先祖の住んでいた場所に興味があり、彼らにそこを訪れてみたい、という気持ちが生まれても不思議ではない。別れてはいるが親族に会いたい、祖先の墓参りをしたい、と思うこともあるだろう。また本国の人々の場合、親族や友人がどこかに移民したのであれば、彼らがどこでどんな暮らしをしているか、訪れてみたい、という気になるかもしれない。VFR訪問者は宿泊・食費にお金を使わないことは予想できるが、ホストは豪華な食事に連れて行ってくれるかもしれない。VFR訪問者はリピータが多いのではあるまいか。また

親族の墓や言い伝えの場所など、人気の観光スポットとは違う場所を訪れるかもしれない。一方、大学生が留学生等の実家を訪れるといった訪問もあるかもしれないし、友人の訪問と親族の訪問は違うかもしれない。

例えば日本で考えてみるなら、都市化地域の核家族の夫か妻のどちらかの郷里への盆暮れの里帰りが、VFR観光といえるかもしれない。新幹線や飛行機、自家用車などで帰省し、数日間を郷里で過ごす。都会に住む核家族の家よりは広いだろうから、泊るのに何とか都合はつくだろう。子や孫がやって来るのを老夫妻は楽しみにして、一度や二度は外食したり、家で季節の料理をふるまったりする。正月なら一家で初詣にでかけたり、孫たちにお年玉をあげたり、獅子舞などの地元の正月行事を楽しむ。彼らの行動は毎年続くことになる。このような行動はそれぞれの社会の年中行事や慣習、家族の在り方などと強く結びついており、なかなか全世界共通の基盤の一般化を行うことは難しいのではないかと、思われる。日本の場合世界中に日本にルーツを持つ人々が散らばっているが、第二次世界大戦前の移民に関して、移民した親族との絆を保っている家族は少ないだろう。

個別の社会のケースはそれぞれの社会の成り立ちや歴史、親族構造などがずいぶん異なっているので、論文毎に扱っているテーマはずいぶん異なっている。1) 国内旅行として、都市化に伴う人の移動によって生じるネットワークのためにどのような観光行動がみられるのか (e.g. Rogerson 2015) 2) ホストにどのような負担が生じているか、またホストはどのように楽しんでいるか (e.g. Shani and Urieli 2012)。3) 大学生のもとにVFRが訪ねてくることはしばしばあるが、留学生の多い大学で、現地の大学生と留学生とではどのように違うのだろうか (e.g. Bischoff and Koenig-Lewis: 2007) 等々である。

さて、サモアのVFR訪問者の実態について、見てみよう。表2はサモア独立国観光局が出しているデータで年度別目的別に区分した訪問者数である。訪問者数は2010年から19年の間コンスタントに増加している中、休日(別のデータではレジャーとなっている場合もある)を過ごす観光客と

VFRとはほぼ同じ位の数字が並んでいる。割合でいうと、31.1%～から44.0%の間で増減を繰り返している。

比較のために、表3を見てみよう。これはオセアニア主要国といっても島嶼地域のみであるが、それぞれの諸島の2018年の目的別海外訪問客数とその割合を示した表である。クック諸島、フィジー、ニューカレドニア、ヴァヌアツのように観光に特化した国・地域に対して、パプアニューギニアのようにビジネス客が多いという特徴がよく出た国もある。アメリカ領サモアだけは、サモア独立国よりVFR比率が高いが、ここはむしろ観光開発があまり進んでいない、ないしは退化したということと関係があらうか。南太平洋観光の先駆けとして1960年代から存在していたラグジャリーなレインメーカー・ホテルは、リノベーションもままならないまま、次第に荒れていき、2015年にそのほとんどが解体されたという（Wikipedia n.d.）。また、1965年に完成したパゴパゴ湾のはるか上空を通り、絶景を楽しめた観光資源としてのケーブルカーは、1980年に米国空軍の航空機がケーブルに衝突するという不幸な事故が生じたために運航不能となり、今日に至っている。観光客は隣のサモア独立国へ行くようになってしまった。

表2、表3からは、サモア独立国のVFR比率が、周囲の諸島と比較しても、多いことが分かるのである。

表2 サモア独立国年度別目的別訪問者数

目的 年度	休日	親族友人訪問 (VFR) ()内はパーセンテージ	ビジネス	その他	スポーツ	計
2010	48,730	50,405 (38.9)	11,738	16,823	1,804	129,500
2011	44,049	56,157 (44.0)	392	14,270	735	127,603
2012	53,047	52,542 (39.0)	14,151	13,035	1,789	134,564
2013	45,307	44,877 (36.0)	11,642	20,378	2,375	124,579
2014	46,307	45,690 (34.7)	13,384	25,341	1,027	131,749
2015	52,136	44,565 (32.1)	11,665	28,209	2,468	139,043
2016	57,321	48,835 (33.4)	12,209	26,167	1,533	146,065
2017	68,390	49,002 (31.1)	12,520	26,007	1,596	157,515
2018	61,452	75,912 (44.0)	9,632	24,029	1,471	172,496

出典：Tourism Authority, Samoa webpage (<https://www.samoatourism.org/articles/89/total-visitor-arrivals-by-purposeyear>)

表3 2018年度 オセアニア主要国の目的別海外訪問客数とその割合

() 内はパーセンテージ

国名\目的	レジャー	VFR	仕事	その他
アメリカ領サモア	4,840 (23.9)	10,431 (51.6)	3,548 (17.5)	1,402 (6.9)
クック諸島	145,168 (86.8)	13,633 (8.2)	6,193 (3.7)	3,766 (2.3)
フィジー	658,585 (75.7)	80,441 (9.2)	52,305 (6.0)	78,978 (9.1)
ニューカレドニア	67,439 (56.0)	25,954 (21.6)	13,859 (11.5)	13,090 (10.9)
バブアニューギニア	20,004 (16.5)	7,645 (6.3)	87,853 (72.3)	6,001 (4.9)
サモア独立国	61,452 (35.6)	75,912 (44.0)	9,632 (5.6)	25,500 (14.8)
ソロモン諸島	8,955 (32.1)	4,163 (14.9)	7,093 (25.5)	7,655 (27.5)
ヴァヌアツ	91,726 (79.3)	8,616 (7.5)	7,552 (6.5)	7,740 (6.7)

(出典：South Pacific Tourism Organisation 2018)

里帰り移民の観光行動

実は、私の里帰り移民研究は、最近とりあげられるようになったVFR研究を参照しながら、その枠組みをサモアに当てはめてテーマを見つけたのではない。むしろ、サモアの観光開発を見ていくうちに、それが、ニュージーランド、オーストラリアの白人中産階級をターゲットとしたものとな

っていないながら、実際に多く来ているのはVFRである、という点に着目して、研究が進行したというのが正しい。

テウイラ観光祭は、もともとはそういう「外国人」にサモア文化を紹介するためのものであった。しかし、熱心に取り組み、かつ村同士や若者集団同士、学校同士という競争原理を取り入れた結果、人々の取り組み方は相当な盛り上がりを見せた。もともと、毎年6月1日に独立記念祭を行っているが、そこでも競争の要素が取り入れられていることがある。しかし、それよりも大々的になったのがテウイラである。

留学生や青年海外協力隊員たちは、年齢の近い現地の知人ができたり、ホームステイをしたりすることがよくあるが、そうした人々もサモア人の友人やホストが「これを見なくっちゃ」と勧めてくれたと述べている。この時期のサモアは、ちょっとした興奮に包まれていて、人々は非日常を楽しんでいる。すべての行事を見ることはないが、これは、と思うものを見る。テレビの中継もある。



写真3 タウラフォガ（石投げの遊び）に興じる人々。2003年度テウイラ観光祭

また、ミス・サモア・ページェントには、必ずディアスポラ・コミュニティのミス・サモア・XX（ミス・サモア・ウェリントンとか、ミス・サモア・ユタとか）が2～3人は参加する。そして客員参加のコーラス・グループなどもある。ディアスポラがちらほらいるコーラス・グループで、白人も大勢いる。多分観光を兼ねて、友人の故郷に行ってみたい、といったことになったのではないかと想像できる。

そして、その競争するチームの詳細な違い、ダンスの腕の振り方、合唱指揮者の間合いのアドリブなどの詳細は、サモア文化に既に親しんでいる人はともかく、「外国人」が見てすぐに評価できるものではない。したがって、「外国人」は30分見たところで、もう飽きてしまって席を離れる。飽きずにコンペティションの終了する午後11時とかまで見ているのはディアスポラも含めたサモア人である。またイベントの司会者はバイリンガルで司会していても、そのうちにサモア語だけになってしまい¹³⁾、サモア語のわかる人だけが腹を抱えて笑っていたりする。

実は、観光局は既にこの観光祭は役割を終えた——観光地としてのサモアは確立しているので、もう祭りは必要ないだろうという読み——ので、止めたいと思っているという話を10年以上前に聞いたことがある。政府予算はもう降りないので、スポンサーを探してこの行事を続けるしかない。といったわけで主催者としては大変なので止めたい、と思っているが、サモア中の人々がこの行事を楽しみにしているので、おいそれと休止するわけにもいかないし、政府も開催には前向きである、と2011年の調査の際に小耳に挟んだ。

また、この「サモア文化祭」を楽しみしているディアスポラ・サモア人もいる。もちろん、観客の中にディアスポラの人々が入っていた場合、一見では見分けはつかない。2世、3世の場合には、必ずしもサモア語を流

13) 原因と結果の関係は微妙だが、サモア語のわからない人がいれば英語混じりということもあるけれども、その必要がなければ、サモア語になってしまうのだろう。逆にまた、英語で話してくれない、としたら、「外国人」観客は来ない。

暢に話することができるわけではないが、両親ともサモア人の家庭では、話せないけれども聞いたらわかる、という2世、3世は多い。観光祭をざっと見ることができる短いビデオが、YouTubeに何件も上がっている。Coconet TV（島嶼地域のテレビ会社の連合）制作の2017年のものを見ると、伝統的ゲームに興じる様や、摩擦で火を起こす昔の発火方法の実践の様など、その後舞台ではダンスが披露されている。ディアスポラの観客にインタビューし、「サモア人が皆集まって来るのはいいよね。」「いい経験だわ。私は初めて来たの。」「シドニーから来たんだ。」といった会話を引き出すインタビューアー自身、ディアスポラであることを思わせる。素人らしくサモアン・ダンスを習ったりする。2011年のテウイラの様子をリポートするタガタ・パシフィカ（ニュージーランド公共放送の国内の太平洋諸島民向け情報番組）では、タタウ・ダンス・グループとマナアキタンガ・アオテアロアの出場が報告されている。前者は、ニュージーランド国内で活動するサモア・ダンスのショーをするグループであり、後者はマオリのダンス・グループである。2011年のミス・サモア・ページェントはサモアとオーストラリアから6名出て、とあっさり説明があるだけだったが、過去にミス・サモア・ニュージーランドを経験した女性がこの時サモアを初めて訪れて母の郷里のサヴァイイ島に行く、という場面も出てきた。テウイラ観光祭が単なるサモアだけのできごとではなくて、世界中のサモア人を巻き込んだ大きな催しとなっていることが強調されている。

確かに入国者数を見るとVFR入国者は観光祭が開催される9月に集中しているわけではないし、その前の8月も含め取り立てて多いわけではない。むしろ、12月が最も多く、他の月の2倍ほどにも上っている（表4）。ただ、VFRの多い12月やテウイラの時期、サモアには非日常の空気が漂う。旅の経験は非日常であるが、現地の人々にとってはそれが日常である、というけれども、この時期のサモアはホストもゲストも非日常を味わっているのである。

VFR訪問者の目的はいろいろであるが、最も多いのは儀礼交換であり、

とりわけ葬式は突然起こる。そのほかに多いのは、親族が集まるファミリー・レユニオンであるが、これは12月に開催されることが多い。そのほかに散発的に行われる家族の行事に併せて、人は集まる。儀礼交換に来る人は、当然現金を持ってくることが期待されている。ディアスポラは村に滞在することが多いが、ホテルに滞在する人もいる。特に配偶者が外国人の場合、村の暮らしは最初からあきらめることもある。また最初は村に滞在していても、プライバシーが恋しくなると、街に行って数日ホテルに泊まる場合もある。アピアにある比較的リーズナブルなホテルはディアスポラで満員御礼となることもある。また一部のディアスポラからは、村に滞在するより、街のホテルに泊まった方が安上がりだ、という声も聞こえた。何かと親族のために気を使ったりすると、その出費は馬鹿にならない。ディアスポラはサモア人親族を招待して、街のレストランで豪遊することもある。かつて1980年前後には、レストランというと客は白人のみであったが、今ではサモア人大家族が食事をしていることもある。ディアスポラが招待していることが多い¹⁴⁾。

ディアスポラはダンスショーを見たり、ミニバスを借りて風光明媚な場所を現地のサモア人親族とも共に見に行ったりもする。調査によれば、2013年のデータで、滞在期間中一日でレジャー客はWS\$¹⁵⁾ 274.4を出費するが、VFRはWS\$235.5の出費である。確かに単価は低いが、2012-2013年の調査でレジャー客が、平均8.7日の滞在に対してVFRは、14.7日も滞在する (Min. Tourism 2013?: 11) のであるから、十分にお金を落としてくれている。

14) 筆者は、サヴァイイ島で牧師の墓石を建てる一族の旅行行事に同行したことがあるが、レストランの朝食など、ちょっとした出費はすべて同行したニュージーランドから訪問中のイトコが払っていた。

15) サモア・ドル、ターラーともいう。2015年末で、1 サモア・ドル=56円程度。

おわりに

ディアスポラ・サモア人の里帰り観光は、いわゆるVFRの観光研究の後追いだけでは状況が分かりにくそうだ。彼らの里帰りは単なる物見遊山ではなくて、グローバルサウスとノースの枠組みの中で考える必要がある。出稼ぎと送金という目的で始まったサモア人の移民・移住は、緊密なネットワークで結ばれている。もちろん、このようなウェットな関係を嫌って、サモア人同士の付き合いをやめてしまう人々もいる。しかし、サモア人をやめてしまいたい、と思っても、儀礼交換そしてファイン・マット、また首長制に彼らが絡めとられていく過程があることは、別途論じた（山本2018）。

サモアの観光開発は、依然として主たるターゲットをニュージーランド、オーストラリアの白人中産階級に当てていることは、観光局のサイトのパンフレットでもよくわかる。VFR訪問者に関しては、まったくプロモーションがないので、そこはミスマッチといえるかもしれない。サモア観光局の立案担当者が、VFR訪問者の統計数値を無視しているとは思えないので、そこはプロモーションなどしなくても来る人たちだから、と考えているのかもしれない。しかし最初は白人中産階級を主たるターゲットとして始めたテウイラ観光祭が、そこまで効果があったか怪しい一方で、実際にはディアスポラの気持ちを掴む結果となったことは興味深い。送金や儀礼交換でディアスポラから本国に流れる現金に加えて、里帰り観光はその流れを増幅しているといってよい。サモア独立国の人々は、ダンスや工芸の伝統を守り、グローバルなサモア世界の中心として君臨することに、大きな意味があるだろうと筆者は考えている。

【献 辞】

この研究は、日本学術振興会科学研究費助成金課題番号20520716「移民と本国社会—グローバル・サモア人世界のアイデンティティと互酬性」(2008-2010年)の研究の一部として行われたものに、最近のデータの見直しを加え、修正を加えたものである。この研究に協力をいただいたサモア観光局(Samoa Tourism Authority)に感謝を捧げたい。また、さまざまな議論を交わしたサモアの友人たち、サモアで出会ったディアスポラの人々にもお世話になっている。Fa'afatai lava.立教大学観光学部での講義の機会をいただいた工藤正子氏(現桜美林大学教授)にも謝意を述べたい。

【引 用 文 献】

- Asiedu, Alex Boakye (2008) Participants' characteristics and economic benefits of visiting friends and relatives (VFR) tourism: An international survey of the literature with implications for Ghana. *International Journal of Tourism Research* 10: 609-621.
- Bischoff, Eberhard E. and Nicole Koenig-Lewis (2007) VFR Tourism: The importance of university students as hosts. *International Journal of Tourism Research* 9: 465-484.
- Huang, Wei-Ju, Brian King and Wantanee Suntikul (2017) VFR tourism and the tourist gaze: Overseas migrant perceptions of home. *International Journal of Tourism Research* 19: 421-434.
- Letuli, Letuli, Freddie (as told to Patricia Letuli) (2004) *Flaming Swords of Samoa: The Stories of the Fire Knife Dance*. Honolulu: Watermark Publishing.
- Meleisea, Malama and Penelope S. Meleisea (1980) "The best kept secret" : Tourism in Western Samoa. In F.Rajotte and R. Crocombe (eds.) *Pacific Tourism: As Islanders See It.*, pp.35-46. Suva: The Institute of Pacific Studies, the University of the South Pacific.
- Rogerson, Christian M. (2015) Revisiting VFR tourism in South Africa. *South African Geographical Journal* 97(2): 139-157.
- Samoa Government, Ministry of Tourism (2013?) *Economic Analysis Report*.
- Shani, Amir & Natan Uriely (2012) VFR tourism: The host experience. *Annals of Tourism Research* 39(1): 421-440.
- Tourism Council of the South Pacific (1992) *Western Samoa Tourism Development Plan1992-2001*. Published by the Council for the Government

of Samoa.

Wikipedia (n.d.) Rainmaker Hotel (https://en.wikipedia.org/wiki/Rainmaker_Hotel) (2025/12/20閲覧)

Yamamoto, Matori (1990) Transformation of exchange valuables in Samoa. *Man and Culture in Oceania* 6: 205-37

Yamamoto, Matori (2009) Migration and tourism development in Samoa. *People and Culture in Oceania* 24:51-66.

山本 真鳥 (2018) 『グローバル化する互酬性：拡大するサモア世界と首長制』
東京：弘文堂

山本 真鳥 (2021) 「グローバル・サモア世界の形成ーホームランドと移民社会の力学」『経済志林』88(3): 191-222.

山本 泰・山本 真鳥 (1996) 『儀礼としての経済ーサモア社会の贈与・権力・セクシュアリティ』 東京：弘文堂。

【参照ビデオ番組】

Tagata Pasifika Samoa Teuila Festival 2011

(<https://www.youtube.com/watch?v=OoZI5XpgOO>) (2025/12/20閲覧)

Coconet TV Samoa Teuila Festival 2011

(https://www.youtube.com/watch?v=Ya_0TMhAdHQ) (2025/12/20閲覧)

Homeland tourism by the Samoan diaspora

Matori YAMAMOTO

《Abstract》

Examined in this paper are VFR (visiting friends and relatives) visitors to the Independent State of Samoa, which is located between Hawaii and New Zealand, closer to the latter. Before 1990, the tourism industry did not categorise VFR visitors as tourists since their activities were perceived as being different to those of leisure tourists. However, VFR visitors have recently attracted the attention of researchers due to their distinct tourist behaviours. Since World War II, a significant number of Samoan youths have migrated to New Zealand, American Samoa, the United States and, more recently, Australia. Currently, there are more than twice as many Samoans living abroad as there are in the Samoa Islands. Samoans in Samoa have relied on remittances sent by family members working abroad, and these same remittances have helped the Independent State of Samoa to reduce its trade deficit. This could explain why many Samoan diaspora maintain strong ties with their families back home and often return as VFR visitors. The Teuila Tourism Festival is one of the major attractions for the diaspora, whose detailed knowledge of Samoan culture enables them to fully appreciate the event, unlike ordinary overseas leisure tourists, who only have basic knowledge and cannot enjoy it as much.

